

教宣 せぶん

WBCに見る「団結」の哲学

話題にするには少々遅きに失した感がありますが、WBCにおける王日本の優勝は見事でした。イチローをはじめ、優勝後のシャンパンファイトはチームの団結の強さを如実に物語っていました。あの王日本の「団結」は、どのようにして生まれたのでしょうか。もし、圧倒的な強さで日本が優勝していたとしたら、あれほどまでの「シャンパンファイト」にはならなかったはず。あれほどまでの「団結」や「絆」は生まれなかったはず。

予選リーグで格下と思われた韓国に破れ、満を持して臨んだ2回目の韓国戦にもまさかの敗戦を喫しました。「アジアの雄」というプライドはズタズタに切り裂かれ、世論からは非難を浴び、準決勝に進める確率も完全についえたかに思われた、そんな「逆境」「崖っぷち」から這い上がっての優勝だったからこそ、あそこまでの「シャンパンファイト」になったのではないのでしょうか。あそこまでの「絆」が生まれたのではないのでしょうか。

準決勝に進める確率がついえたと思われた瞬間、韓国に2度目の敗戦を喫した瞬間、アジアの雄としてのプライドを切り裂かれた瞬間、王日本のメンバーは一応に絶望感を味わったはず。等しく苦杯をなめたはず。その逆境を共にした仲間が、メキシコがアメリカに勝利したことで生まれた奇跡の糸を手繰り寄せ、一丸となって3回目の韓国戦にリベンジし、宿敵キューバにも圧勝して優勝をもぎ取ったのです。逆風が強ければ強いほど、絶望感が大きければ大きいほど、甦った時の「団結」も凄まじいものがあることを王日本の優勝が証明しました。

私たちも10月7日の「通知・提案」がなければ、いま、ここまでの組織としての「団結」があったのでしょうか？ 教宣「福岡」や「NANIWA」から、地方部支店で抗議行動が行われた様子が情宣されています。風雨にもかかわらず、派遣団と一丸となって、要請行動が行われた様子が生々しく語られています。東北や東海、中四国など、全国津々浦々で「外に出るたたかい」は展開され、大きな成果をあげています。私たちは「通知・提案」を通して、等しく絶望感を味わい、等しくプライドを傷つけられ、等しく逆境を味わいました。しかし、そこであきらめることなく、わずかな光を見出し、その光を自分たちの

力でここまで大きくし、光を希望に、希望を目標に変えてきています。その過程において、「団結」や「絆」が、より強くなっていると実感します。「通知・提案」がなかったケースより、はるかに大きな団結と絆がいま組織を包んでいると感じます。

私たちは「通知・提案」がなければ、皆、定年まで働こうと考えていたはずですが。この「原点」を忘れなければ、会社の色々な「揺さぶり」や「攻撃」に決して惑わされないはずですが。この「原点」を忘れなければ、「通知・提案」は、会社が私たちに落とした「爆弾」から、私たちの団結・絆を高める「カンフル剤」に成り下がります。

私たちのたたかいで「通知・提案」を、「ボブ」に変えましょう。